

1. 吉野谷村、下吉野と中宮

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4846

1. 吉野谷村、下吉野と中宮

鹿野勝彦

- I はじめに
- II 吉野谷村の概要
- III 下吉野と中宮
- IV おわりに

I はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、1994年度の3年次学生を主対象とした調査実習を、石川県石川郡吉野谷村の下吉野と中宮の2つの集落において実施した。本報告はその調査実習の報告書であり、当研究室の調査実習報告書としては10冊目のものとなる。¹⁾ 調査実習の目的、方法等は、基本的には従来のそれを踏襲しているが、1994年度においては、前年度に調査実習を行った石川郡鶴来町での調査報告のまとめに際して、町の中心部にあたる鶴来地区と、その後背地としての手取川上流域の白山麓農山村地域との関係が問題となったことが、次年度の調査対象地として吉野谷村を選定する1つの動機となった。ただ、調査に参加する学生は全く入れ替わっており、調査実習全体としては、今回も前年度からの継続としてではなく、単年度で独立、完結したものとして企画、実施された。

調査対象集落は、今年度も調査参加者の人数の関係から2つとした。吉野谷村を構成する諸集落のうち下吉野と中宮を対象として選んだのは、後述するように、両集落が吉野谷村の中でも地理的に下端と上端に位置し、立地上からも相当に集落としての性格が異なると予想されたこと、および集落規模が60～70世帯前後と、はじめて調査を行う学生にとっては比較的取り組みやすい水準にあること、などの理由による。参加者は2班に分かれ、いずれかの集落を担当したが、本調査中は全員が同じ宿舎に滞在し、随時情報、意見を交換したし、前後の予備、補充調査や打ち合わせ等も基本的には合同で行ってきた。したがって以下の各論においても、両集落の比較を通して個々の集落の特徴を把握する試みはある程度なされている。

しかし例年のことながら、以下の各論のテーマは各執筆者の個別の関心に基づいているので、それらにおいては吉野谷村全体や各集落についての網羅的な記述や、集落をとりまく地域や行政単位の中での集落の位置づけ、特徴などについて全体的、体系的に把握する試みは、ほとんどなされていない。そこで本稿では、行政単位としての吉野谷村と下吉野、中宮という集落について、とりあえず地理的な立地、近年の世帯数、人口や生業と生活の動態などについて、最小限の基礎的記述を行うとともに、白山麓から鶴来を経て金沢周辺までを含む地域の中での対象集落の位置づけと、そこに住む人々の集落、地域とのかかわりかたとを通時的に把握する枠組を提示することによって、以下の各論への導入としたい。

II 吉野谷村の概要

吉野谷村は石川郡の東部に位置し、村域は西は白山山系に源頭をもつ手取川本流と中流部と、その上流部の一支流、尾添川との右岸一帯、東は妙法山、笈ヶ岳、奈良岳と連なる標高1,500mをこえる稜線に及び、そのほとんどを急峻な山林が占めるが、村を構成する9つの集落はすべて手取川と尾添川、および尾添川の北で手取川に合流するもう一つの支流瀬波川の3つの河川の狭隘な河岸段丘上に集村的な形態で位置している。村域の東の境界は岐阜、富山との県境をなし、北は標高1,100～1,300m前後の尾根で河内村と、西と南は手取川、尾添川をはさんで鳥越村、尾口村と接している。吉野谷村を含む白山麓一帯は県内でも有数の豪雪地帯で、特に尾添川沿いの中宮は、かつては冬期にしばしば雪のために下流部との交通が途絶することもあった。

行政的には吉野谷村は1889（明治22）年に現在の村域が確定したが、村を構成する9つの集落は一般に、手取川沿い下流よりの吉野地区（下吉野、上吉野）、同上流より及び瀬波川沿いの中部地区（佐良、市原、下木滑^{きなめり}、上木滑、木滑新、瀬波）、尾添川沿いの中宮地区（中宮）の3地区に分かれるとされる。吉野地区と中部地区は近接しており、標高も下吉野で約190m、市原で約250mとさほど差はないが、中部地区と中宮地区の間は約6km余あり、中宮の標高も550mとかなり異なっている。こういった事情を反映して、従来より村の主要な公共施設は、3つの地区になるべく平等に配置されるよう、配慮がなされてきたという（表-1参照）。

表-1 吉野谷村地区別主要公共施設（1994年）

吉野地区		中部地区		中宮地区	
施設名	集落	施設名	集落	施設名	集落
下吉野公民館	下吉野	吉野谷村役場	市原	中宮コミュニティーセンター	中宮
上吉野生活改善センター	上吉野	吉野谷小中学校	市原	吉野谷村健康管理センター	中宮
吉野保育所	上吉野	吉野谷村教育委員会	佐良	吉野谷セミナーハウス	中宮
白山麓健民体育館	上吉野	吉野谷村公民館	佐良	新中宮温泉センター	中宮
鶴来警察署吉野駐在所	上吉野	市原区集会所	市原	J A 中宮出張所	中宮
白山郷消防署白山分署	下吉野	木滑新集会所	木滑	中宮温泉スキー場	中宮
吉野郵便局	上吉野	瀬波生活改善センター	瀬波	村営くろゆり荘	中宮温泉
J A 吉野事業所	下吉野	双葉保育所	木滑	白山自然保護センター展示館	中宮温泉
J A 吉野出張所	上吉野	国保診療所	市原		
工芸の里	下吉野	大門園（老人養護施設）	佐良		
		大門温泉センター	佐良		
		J A 吉野谷支所	市原		
		吉野谷村商工会	市原		
		花ゆうゆう	佐良		
		石川県白山自然保護センター	木滑		

村内の集落間を結ぶ交通路も、基本的には手取、瀬波、尾添川沿いにあり、今世紀はじめには吉野地区から中部地区まで、やや遅れて中宮地区へも車道が完成していた。下流部との関係では、特に手取川扇状地の扇頂に位置する鶴来町（現鶴来町鶴来地区）とのつながりが深く、特に1927（昭和2）年に、木滑の対岸、鳥越村河原山の「白山下」駅と鶴来の間で運行を開始した、北陸鉄道金名線が重要な役割を果たしていた。鶴来は白山麓各村にとって、それ自体が第1次的な中心地であるとともに、金沢、寺井方面への鉄道の基点でもあり、いわば外部世界への門口でもあったのである。²⁾ 金名線はもともと金沢－名古屋間を白山を越えて結ぶという、遠大な構想に基づいて名づけられた名称であったが、「白山下」以遠の計画は具体化せぬまま、白山麓での後述するさまざまの開発計画にともなう道路整備やモータリゼーションの進行によって歴史的役割を終え、1980年代には鶴来の「加賀一ノ宮」駅以遠が、事実上廃線となった。吉野谷村と鳥越村、尾口村の各集落の間は、要所にかけられた橋により往来されていた。中宮は、尾添川対岸の尾口村尾添とともに、かつては白山の加賀側の登拝口であり、上流部の中宮温泉への入口でもあったが、基本的には、1977年に白山スーパー林道が開通して岐阜県側と結ばれるまでは、いわゆる行き止まりの集落であった。後述するさまざまの開発工事の進行によって道路整備が進み、冬期の除雪体制が整備された今日では、中宮地区より下部への自動車による往来は年間を通じて確保されるようになり、所要時間も中宮から金沢西郊まで1時間前後に短縮されたが、1970年代までは、吉野谷村、とりわけ中宮地区は、平野部との往来の容易でない山村としての性格がなおきわめて強かったといえる。

吉野谷村と各集落の世帯数、人口の動態をたどれる資料からまとめると、表-2のようになる。表-2からあきらかかなように、村を単位としてみた場合、その世帯数は1960年代前半までは一定の水準を保って安定していたが、その後1980年前後まで漸減し、1980年代半ばからはむしろ多少の変動を示しつつ、わずかに増勢に転じている。一方、人口は1920年前後を頂点とし、1950年代から1980年前後にかけて急速に減少してゆくが、以後はほぼ安定状態にある。しかし、個々の集落別に世帯数、人口の変動を検討すると、村を単位とした上記の世帯数、人口の動態の傾向と個々の集落のそれとは、必ずしも一致しない。この差異は世帯規模や世帯構成、人口の性比や年齢構成まで踏みこんでみた場合、さらに顕著になるが、その点はⅢ及び各論の2、10章で下吉野、中宮について個別に検討する。³⁾ ここでは、従来吉野谷村を含む石川郡の白山麓の村々が、石川県内では奥能登地方などとならぶ典型的な過疎地域と考えられてきたことに対し、よりきめ細かく集落レベルで把えた場合、「過疎」の形成過程も実態も決して一様ではないことだけを指摘しておく。

生業面からは、吉野谷村を構成する集落は基本的には山村ないし農山村とみなされてきたようである。このような視点は今世紀初頭までに限れば、おおむね妥当していたといえよう。すなわち、地区によって比重はさまざまに異なるにせよ、狭小な水田での水稻耕作の他、常畠や出作り

表-2 世帯数、人口、世帯平均人数の動態

年 度	吉野谷村			下吉野			中宮		
	世帯数	人 口	世帯人数	世帯数	人 口	世帯人数	世帯数	人 口	世帯人数
1886 (明治19)	463	2,904	6.27				113	648	5.73
1889									
1921 (大正10)	445	3,048	6.85	50	243	4.86	111	542	4.88
1961 (昭和36)				54	250	4.63	98	467	5.77
1965	469	2,428	5.18	48	224	4.67	112	396	3.54
1970	435	1,881	4.32	56	238	4.25	74	275	3.72
1975	439	1,866	4.25	46	202	4.39	66	239	3.62
1980	401	1,514	3.78	50	221	4.42	66	222	3.52
1985	416	1,534	3.69	49	204	4.16	79	229	2.90
1990	409	1,488	3.64	52	213	4.10	67	221	3.30
1994 (平成2)	425	1,502	3.53						

資料出所 1886～1961『角川日本地名大辞典・石川県』
1965～1990 国勢調査、1994 村役場

による焼畑での雑穀などの栽培、葉煙草や麻などの換金作物の栽培、養蚕、炭焼きや木挽き、山菜などいわゆる山産物の生産、採取など、さまざまの農林産物生産とその一次加工が、地域の主たる生業であった。とりわけ瀬波、中宮などの山村的性格の強い集落においては、当然のことながら山林での焼畑耕作や林業、林産物生産、加工への依存の度合が強かった。

しかし1910年代に入ると、手取川上流域では電源開発工事が開始され、これと平行して鶴来を起点とする道路、鉄道などの建設、整備も進んでいった。その影響は吉野谷村では、直接的にはまず吉野、中部地区に、そしてやや遅れて中宮地区へと及んでいった。村内で建設された発電所だけを列挙しても、市原（完成1920年）、吉野第1（1921年）、吉野谷（1926年）、吉野第2（1930年）、中宮（1935年）と15年ほどの間に5つを数えるが、このような事情は、隣接する河内村、尾口村などにもほぼ共通している。これらの工事そのものや、稼働はじめた発電所などが直接、間接にもたらした雇用やさまざまな物資、サービスの需要が地域の経済にもたらした影響はきわめて大きく、かつ複雑で多様なものであった。

電源開発、治山・治水などを目的とする大規模工事は、第2次大戦後もこの一帯で継続されるが、尾口・白峰村にまたがる手取川ダム（完成1980年）と吉野谷村を経由する白山スーパー林道の開通によって一段落し、1970年代以降は、開発の主眼は観光におかれようになる。吉野谷村においても、観光は村の将来を託すべき部門として、主に村営ないしはいわゆる第3セクターの形態をとり、地区の特性と地区間のバランスに配慮しつつ、順次、拠点となる施設が建設、整備されて今日に至っている（表-1参照）。しかし、それらは現在までのところ、村内に一定の雇用を確保するという役割を果たしているとはいえ、必ずしも充分な収益をあげて村の基幹産業と

位置づけられるほどの段階に達してはいない。

その一方で、かつての主生業であった農林業の位置づけも著しい変化をとげた。水稻耕作は、特に吉野、中部地区などでは、電源開発とともに耕地、灌漑施設の整備が1920年代以降進んだことにより、比重が高まつていったが、1970年代以降は全国的な趨勢と平行して重要性が低下してゆく。常畠や出作りの焼畠による農業や林業も、ほぼ同時期、ないし作物、業種によってそれより早く、これも主に外的な状況の変化を受けて衰退してゆく。1970年代半ばには農家数は減少し、しかもそのほとんどは2種兼業化していったし、積極的に林業に従事する者もほとんど姿を消した（表-3参照）。

表-3 農家と農業

年 度	下 吉 野								
	農家数	農 家 種 別			兼 業 形 態			農業就業者	
		専 業	1 兼	2 兼	常 勤	臨 勤	自 営	人 数	高齢者比%
1960	43	13	25	5	21		9	86	17.4
1965	41								
1970	42	5	7	30	29	5	3	81	38.3
1975	42	4	1	37	31	2	5	40	52.5
1980	39	2		37	27	5	5	37	56.8
1985	38	1		37	29	3	5	53	56.6
1990	36	1	1	34	31		4	40	72.5

年 度	中 宮								
	農家数	農 家 種 別			兼 業 形 態			農業就業者	
		専 業	1 兼	2 兼	常 勤	臨 勤	自 営	人 数	高齢者比%
1960	80	7		73	64		9	125	32.8
1965	72								
1970	53		1	52	46		7	50	56.0
1975	47			47	26	18	3	34	64.7
1980	34	3		31	19	12		26	65.4
1985	31	6		25	22	3		22	68.2
1990	13	1		12	8	2	2	12	83.3

「高齢者比」は農業就業者中60歳以上の人々の占める比率を表す。

資料出所 『農業センサス』

他方、すでに述べたように、今世紀初頭以降、1980年ごろまで、村内ならびに手取川上流域一帯では大規模な開発工事が続き、また稼働しはじめた施設そのものも、多くの雇用機会を住民に提供してきた。その典型が北陸電力の発電所であったといえる。だが、それらの工事がほぼ終了し、発電所等も技術革新、省力化によって新たな雇用を控えるようになる。村内で就業すること

がしだいに困難となった反面、交通事情の改善によって、鶴来はもとより松任、野々市、金沢、小松といった都市部へ通勤することが容易になったのも、この一連の変化の一つの結果であった。

しかしこういった変化の生じた時期やそのことがもつ意味は、吉野谷村の内部でも、集落によってそれぞれ微妙に異なっている。そのことはまた、先にふれた世帯数、人口の動態や世帯構成、生業や生活のありかたなどの集落間の差異とも密接に関連している。この点は各論でもふれるが、以下では下吉野と中宮について概観しておく。

III 下吉野と中宮

下吉野は吉野谷村の中ではもっとも下流部に位置し、地形的にも相対的にやや広い段丘平面に恵まれていることを反映して、水田面積も比較的大きく、農村としての性格の強い集落である。もっとも吉野地区においても水田は、1921年に完成した吉野第1発電所の建設とともに施工された灌漑設備やその後の耕地整備によって造成された部分が多く、それ以前には畠作、特に麻、桑、葉煙草などの商品作物栽培がさかんであり、それらは鶴来を通じて出荷されていたと考えられる。また、集落の背後には広大な山林があって林家も多く、林業も一定の役割を果たしていた。一方、前述のように1920年代後半には、手取川対岸の距離的には近接した鳥越村に鉄道が開通しており、鶴来やその先の平野部との往来も容易となっていたし、開発事業との関連で一定の雇用も存在していたから、通勤賃労働に従事する人々も少なくなかった。要するに、下吉野においても世帯レベルでは農業、それも水稻耕作を基幹としながら、さまざまな副業や賃労働にもある程度の比重をかけて従事するというのが、1960年代前半ごろまでの平均的な生業のありかただったといえる。

そして日本の多くの農業集落と同様に、ここでも1960年代後半から1970年代前半にかけて、農家と農業のありかたは一変する。すなわち農家の2種兼業化がすすみ、農作業の機械化やその一部、ないし全体の委託が進行する。しかし下吉野では今日まで、集落の世帯数、人口や農家数そのものは、さほど減少していない。つまり下吉野においては、世帯内の個人の流動は別として、世帯の流出、流入はほとんど見られない。そこでは世帯は1970年代後半以降、主たる収入を鶴来より下流部への通勤賃労働から得るようになったとはいえ、なお農家として存続し続けており、農作業そのものは主に世帯内の高齢者にゆだねられるようになったというものが、平均的なありかたとなってきたのである。このことは世帯の規模が現在も比較的大きく、その構成も直系家族によるものが大半を占めており、高齢者の単身、夫婦世帯の占める比率が少ないという点にも反映されていて、後述する中宮とは鮮かな対照をなしている。

下吉野を含む吉野地区は、その立地条件から吉野谷村の中では他地区に比べ、一般にやや早くより開発が進んだといえようが、観光開発に関してはむしろ後発で、地区内にあって直接観光客を対象とする施設である「工芸の里」が設立されたのは、1980年代後半になってからである。

「工芸の里」構想は、単に地元の観光資源を商品化し、住民の雇用を確保するだけでなく、村外出身の工芸家集団に製作や展示、販売などの活動の場を提供して定住を促し、従来の住民との交流を通じて地域の活性化をはかるとする点に独自性があるといえよう。その詳細については各論に譲るが、全体としてはその独自性のゆえに、現状では構想にかかる行政、在来の住民、来住した工芸作家それぞれの間で、これまでのあり方に対する評価や今後の展開についてさまざまに異なる見解があり、なお手探りの試行が続いている段階であるといえよう。地区にかかるわざりのある観光開発計画としては、他に石川県が主導し、鳥越、河内村域と一体化して構想されている「白山麓テーマパーク構想」があるが、これについても当事者の見解、対応はさまざまに異なっていて、実現の可能性は当面なお流動的なようである。

一方、中宮は吉野谷村の最奥に位置し、もともと農村というより山村的な性格の強い集落であった。地形的な制約から、水田や常畠の面積は狭少で、出作りによる焼畠耕作が重要であったが、生業全体としてみれば農家のほとんどは表-3からもあきらかのように、1960年時点でも2種兼業であり、その分、経済的には従来から林業のほか、運送業や中宮地内といっても集落からは8km上流の湯谷川沿いにある中宮温泉での旅館業などの自営業、さらには開発関連企業での賃労働や出稼ぎなどが重要な役割を果たしていた。出稼ぎ先としては北陸地方の諸都市の他、特に京都、大阪などの関西方面が多く、京都などでは中宮出身者の懇親会が定期的にもたれていたという。また中宮は1935年に完成した中宮発電所をはじめとする電力関連施設の運転、保守基地としての性格をもっており、従来の集落の他に1960年代までは北陸電力の社宅も相当数存在していた。

しかし1970年代に入ると、中宮では一方で在来の集落における農業、林業ばかりが急速に進むとともに、地区周辺の発電所等の施設での省力化によって社宅も撤去され、在来の住民からの新規の雇用も著しく減少した。他方、1970年代後半から1980年代前半にかけては、道路そのものや冬期の除雪態勢が整備され、スーパー林道が開通するなどして、交通事情は著しく改善された。地区からの通勤圏が拡大するとともに、集落背後の山腹を伐切してのスキー場の開設、中宮温泉の増改築などの本格的観光開発が吉野谷村域内ではもっとも早く開始され、関連の宿泊施設、飲食、土産物店や温泉、駐車場等の整備も、私的、公的に進められてきた。しかしこれらの観光開発は、全体としては今日でもなお地区に充分な収益をもたらしておらず、したがってその世帯数や人口の急速な減少、とりわけ青壮年層の流出による、いわゆる過疎化の流れをとどめる効果をもつにも至っていないようである。

中宮における世帯数、人口の動態は、先にふれた北陸電力社宅の存在や、春から秋にかけてのみ営業し、冬期は無人化する中宮温泉従業員の扱いが統計によって異なるなどの理由により、把えにくい部分があるが、いずれにせよ1970年代以降の過疎化傾向はあきらかで（表-2参照）、その結果、世帯数、人口の減少のみでなく、現在では著しい住民の高齢化と世帯規模の縮小が生じている。これを世帯構成からみると、中宮の世帯は直系家族世帯と、高齢者の単身、夫婦世帯

とに形態上は分化しているが、後者は前者の下の世代が転出した結果生じたものであり、その転出はかなり早い時期、すなわち、地区内に居住したまま鶴来以遠へ通勤することが可能になった1970年代末よりも以前に、すでにかなりの世帯の挙家離村とともにに行なわれたと思われるのである。⁴⁾ ただ注目すべき点は、これら地区外への転出者の多くは、実は鶴来から松任、野々市、金沢までの、中宮と容易に往来できる圏内に定住する傾向にあり、中宮に単身、ないし夫婦のみで残っている高齢者の多くは、これら下の世代の転出者と、日常的にかなり密接な関係を維持し続けていることであろう。この問題についても、詳しくは各論でふれることとなる。

IV おわりに

下吉野と中宮は吉野谷村の両端に位置し、集落としてのありかたや、とりわけこの約50年間の変化の過程は、上述のようにあきらかに異なっているが、その相違のかなりの部分は、たしかに両地区のおかれている自然的な立地条件や、外部世界で生じた経済的、社会的变化によって規定されてきたといえる。しかし一方で、集落それ自体や集落を構成する世帯、個人、あるいは集落がその一部である行政単位としての吉野谷村などは、一定の条件と限界の下ではあれ、選択、決定し、行動する主体としてその変化の過程に参画してきたのである、しかも各々のレベルでの主体の判断や行動は、ある時点においても決して済一性があったわけではないし、通時的にも必ずしも一貫していたわけではない。

たとえば特定の開発計画や事業、イベントなどの構想から企画、実施の過程においても、村と集落間、集落相互間、集落内の世帯間、世帯内の個人間など、いずれのレベルにおいても、主体の判断、選択、行動、評価などはさまざまに多様であった。それでもかつては、そのことの可否は別として、各レベルでの実力者、有力者の意向が、そのレベルでの意志決定を主に方向づけてきたといえようが、現在では有力者、実力者の役割は、むしろ各レベルでの多様な意見、意向を敏感に察知し、調整することにあるように見受けられる。そうなってきたことの背景には、いうまでもなく個々の個人や世帯の生活において、集落や村をこえて直接外部と結びついている部分が拡大し、集落や村の内部、あるいは世帯内の関係の重要性が相対的に減少したという事実がある。しかしそれならば集落そのもののもつ意味がそこに住む人々にとって失われつつあるのかといえば、必ずしもそうともいえないようである。すなわち今日では集落における住民の生活は、かつて以上に村、県、国などの上部の行政への依存を強めている。例えば道路の除雪や小中学生の通学手段、あるいは高齢者の医療といった、現在では日常的に不可欠であり、当然のこととされるようになった各種のサービスを確保することから、道路工事や耕地の基盤整備といった公共事業を誘引することまで、集落は単なる自治組織という以上に、行政への働きかけの単位として機能しなければならない。一方、村をはじめとする行政もまた、集落を事实上その末端機構とみなして、効率的に情報を伝達し、事業を展開してゆくために利用しようとする。かくして集落の

まとめり、団結は、むしろ近年になって住民、行政の双方から、より強化され、再生産されるようになったといえよう。ただしそのまとめりの本質は、かつてしばしばそうであったとされるような閉鎖的、排他的で、一部有力者に一方的に支配されるような性格のものではありえない。

個々の集落やその住民が当面している問題や、それへの対応の具体的なありかたは、それぞれが置かれてきた立地や歴史的条件によってさまざまであり、ここでとりあげた下吉野と中宮に限っても、対照的といいたいほどに異なっている。しかし集落の、特定の有力者世帯（イエ）を中心とする階層的秩序をもつ自治的な集団から、行政機構の末端単位として、上部への働きかけと上部から伝達される事項の受容とに重点をおき、内的にはいわゆる「民主的」な原理に従って運営される集団へという変化は、共通して生じているように思われる。こういった変化は、おそらくは下吉野や中宮に限らず、近年の日本の村落部の集落において、ある程度共通して見られるのではないかとも思われるが、それを論証することは本稿の当面の目的をこえる。

本報告書も、例年のことながら、学部3年生を主体とした調査実習という制約上、執筆者、指導者の力の限界から、記述、分析においては多くの不十分な点や誤りを内包していることと思われる。関係者各位の忌憚のないご批判、ご指導をお願いする次第である。

注

- 1) これまでの調査実習報告書の一覧は、巻末の参考文献参照。
- 2) 鶴来町と白山麓の村々の関係については『鶴来町、新町と月橋町』、特に1～4章参照。
- 3)とりわけ中宮の場合、そもそも集落の構成単位としての世帯、あるいは住民を、どの範囲で把握するかが大きな問題であり、統計上の数値の扱いが困難な面もあるが、それについては10章で詳しくふれる。
- 4) 挙家離村については、特に1963（昭和38）年の、いわゆる「三八豪雪」が直接的なきっかけとなったとされる。